

研究課題

話したい！話せた！伝わった！ 児童が主体となる授業づくり

副題

～課題解決型の外国語活動を通して～

学校名

東京都大田区立入新井第五小学校

所在地

〒143-0016
東京都大田区大森北6-4-8

ホームページ
アドレス

<http://academic2.plala.or.jp/irar5e/>

1. 研究の背景

社会的背景は

グローバル化が急速に進展し、世界で活躍する人材が求められている。他国の人と様々な地球規模の問題を解決したり、他国との経済競争の渦の中で積極的にコミュニケーションを図ったりできる人材の育成である。大田区においても国際空港「羽田」が開港し、「国際都市おおた」として外国人に親しまれるまちづくりを目指している。

このような背景の下、次世代を担う子どもたちは、更に日本にいながらも来る東京オリンピックがそうであるように、他国の人とコミュニケーションを図らなければならない場面が多くあるであろう。その時、多様な文化・価値観をもつ人々に対して、偏見をもたずにコミュニケーションをとりながら、豊かな人間関係を結び、様々な人々と協力して、共存・共生していくことが必要となる。

2. 研究の目的

本校の児童は、「素直で落ち着いた学校生活を送っているものの、自分の感情や思いを表現したり、友達の思いを受け止めたりすることが十分ではない。」という実態が挙げられた。

そこで、外国語活動を窓口にして、自分とは異なる人を受け止め、積極的にコミュニケーションをとろうとする児童を育てたいと考えた。

研究主題を「話したい！話せた！伝わった！児童が主体となる授業づくり～課題解決型の外国語活動を通して～」とし、課題解決型外国語活動を実践する。課題解決型外国語活動とは、担任が、児童の願いや実態から学習課題を明確にし、児童に英語を話さなければならない場を設定することで、児童が主体的に課題に向かって解決しようとする姿が期待できる活動である。児童は学習課題に向かって、「話したい」という思いをもち、友達と協働しながらその思いを達成するために主体的に活動していく。その中で、実際に「話せた！」「伝わった！」という喜びや成就感が体験できる。この課題解決型外国語活動を積み重ねることによって、児童に、積極的に人とのかかわりを楽しみながら、お互いの立場を尊重出来る態度を育てたい。

3. 研究の方法

文部科学省の動向を踏まえながら本校の外国語活動は、学習指導要領のねらいに沿った授業を展開する。

- ・チャレンジングリッシュ（課題解決型学習）とイリゴジョージの（日常的な取り組み）の二本の柱で研究主題に迫る。
- ・1, 2年生は年間8時間～10時間、3, 4年生は年間10時間～12時間を「英語を扱う時間」で実施する。

- ・ 5, 6年生は「外国語活動」35時間のうちチャレンジングリッシュを3単元 20時間～25時間程度で実施する。残りの時間は、Hi, friends等を活用したプログラムの学習を行う。
- ・ 児童が日常的に英語に触れるために、教員一人一取り組みを行う。
- ・ 全学級が研究授業を年1回行い、協議会を通して研究を深める。
- ・ 研究推進委員会を中心に授業研究部、環境部に分かれて推進する。
- ・ 月1回金曜日の入五タイム（8:25～8:35）をイングリッシュタイムとし教員の一人一取り組みの実施をする。
- ・ 年1回以上、外国語活動、英語を扱う時間の様子を保護者に公開する。
- ・ 英語の堪能な教師をJTE（Japanese Teacher of English）：日本人英語教師として活用する。

4. 研究の内容・経過

平成23年度から校内研究を「外国語活動」とし、全学年で学習指導要領の第5, 6学年の目標である「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成」を目指した。英語を用いる必然性のある場を教師が設定し課題解決型活動の授業を進めた。聞き手を意識することで、児童に「伝えたい」という気持ち生まれ、伝え方を工夫し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿が見られるようになった。しかし、自分の伝えたいことを英語で表現することは、インプットの少ない児童にとって容易なことではない。更に、外国語活動が実施されている5, 6年の児童を除いては、ほとんどの児童にとって、授業以外で英語に触れる機会がないことが課題となった。

そこで平成24年度は「話したい！話せた！伝わった！児童が主体となる授業づくり」をテーマとし、前年度同様に課題解決型の授業実践をしながら、掲示物や校内放送、朝の会や帰りの会を活用して児童が身近に英語に触れる環境作りを心がけた。また「イリゴワード」（児童が1年生から6年生までで必ず習得する英単語）「イリゴイングリッシュ」（クラスルームイングリッシュ・担任が授業の中で繰り返し使う英語の共通フレーズ）を設定した。

平成25年度には、更に全教員による「一人一取り組み」を試みた。児童が普段の生活の中で、英語に触れ、親しむための取り組みを教員一人ひとりが自分の考えた手だてで行う実践である。担任は、朝の「いりごタイム」や休み時間等を活用し英語での歌やゲームを実施し、専科教員は英語の掲示物や絵本コーナーを設置し、児童が英語に日常的に触れるための工夫を行った。またパナソニック教育財団助成校としてICTを効果的に活用することも積極的に行った。ICTを効果的に活用すると、より効率的、効果的に英語表現や英単語を習得したり、自主的な活動が期待できたり、更に大型テレビや電子黒板による音声や映像を通して、児童の学習意欲や集中度を高めることが分かってきた。以上のように、英語に触れる場面を多くの場で意図的に効果的に工夫し設定することによって、児童の言語材料が増え、より英語を身近なものと感じて抵抗なく使えるようになり、課題解決型学習に生かせるようになってきた。

更に、平成26年度、1学期は発表会に向けて「つかむ」「伝えたいことを考える」「表現に慣れ親しむ」「発表の準備をする」「伝える」のそれぞれの場面で検証授業を行った。また客観的な評価の工夫として、児童が単元を通して、「伝わった」と達成感をもてたか、毎時間同じ質問で振り返りシートを書かせ、児童の変容から、単元の設定、指導計画、指導内容が適切であったかを評価した。

5. 研究の成果

○成果

課題解決に向けて児童の主体的な姿が見られ、発表時には、達成感、満足感を味わうことができた。

- ・ 知りたい英語表現を電子辞書や辞典で調べたり、教師や外国語教育指導員に進んでたずねたりしていた。
- ・ 英語表現を繰り返し練習していた。
- ・ 全校児童の97%が単元の終わりの振り返りシートに「とてもよくできた・できた」と回答した。

積極的にコミュニケーションをとる姿が見られるようになった。

- ・ 話し手は、相手を意識しながら、繰り返したり、ジェスチャーを交えたり、ゆっくり発言したりと工夫していた。
- ・ 聞き手は、共感的に受け止めながら聞こうとしていた。

指導法の改善が図れた。

- ・ 課題解決型の単元を積み重ねることで、教材の開発や教具の充実が進んだ。
- ・ 外国語教育指導員に授業を任せるのではなく、教師が授業を組み立てる学習形態が確立した。
- ・ 授業のねらいを達成するためには、教師の英語力以上に、日頃の学級経営が大切なことが分かった。
- ・ 学年相互の交流や学年を越えた交流など、活動のねらいに応じて、創意工夫ある学習形態を実践することができた。
- ・ イリゴイングリッシュ（全学年共通フレーズで授業を進める、授業のはじめ、終わりのあいさつなど）を設定したことで教師は安心して授業に臨むことができた。
- ・ 一人一取り組みや英語の掲示物の作成は、全教員で英語教育に取り組み、授業時間以外にも児童に英語を触れさせることができ、児童は英語を身近なものに感じる事ができた。

評価の工夫が図れた。

- ・ 単元を通した一枚の振り返りを使用することで、教師は毎時間の児童の変容や児童一人ひとりのつまづき、不安の理由を把握することができ、個に応じた指導、助言ができるようになった。
- ・ 評価計画を立て、3つの観点で評価することで客観的な評価を行うことができた。

ICT 機器を効果的に活用出来た。

- ・ ICT を効果的に取り入れることで、児童の興味・関心を高めることが出来たり、身につけさせたい言語材料を自ら習得出来たりすることが出来た。
- ・ 電子辞書の活用により、自然と文字情報に触れることが出来た。
- ・ デジタルカメラ動画機能を利用することで、自分達の発表を客観的に見る事が出来、発表を更に工夫することが出来た。

6. 今後の課題・展望

更に主体的な課題解決、積極的なコミュニケーションができるために

- ・ 児童の実態や児童の興味・関心・願いを踏まえて学習課題を設定することで、学習へのより強い動機付けができるようにする。
- ・ 基本表現については、児童が抵抗なく自信をもって言えるまで練習する必要があるが十分に時間を確保することが難しかった。
- ・ 成果を図りやすい技能や、英単語の習得量だけで評価しないように評価規準を発達段に合わせて明らかにする必要がある。
- ・ 低学年、中学年は授業時数の確保が難しい。効率のよい指導計画の工夫や、授業時間以外での時間

の確保を設定する必要がある。

Hi, friends との関連

- ・ 5, 6年生は Hi, friends を活用したプログラムの学習も行っている。Hi, friends との関連を明らかにし、効果的に活用する必要がある。

中学校英語とのスムーズな接続

- ・ 中学校と意図的・計画的な連携を更に実施する必要がある。
- ・ 児童が更に主体的に活動するためには、教師は単元を設定する際、児童の実態を把握し児童の興味の持ちそうな題材を教材化して、学習への動機付けを明確にさせる必要がある。
- ・ 低学年から発達段階に見合う単元の開発、また中学校英語への接続のため、中学校と意図的・計画的な連携を実施する必要がある。
- ・ 積極的にコミュニケーションをとろうとする児童を目指すために、成果を図りやすい技能や、英単語の習得量だけで評価しないよう評価規準を発達段階に合わせて明らかにする必要がある。
- ・ 低学年、中学年は授業時数の確保が難しい。効率のよい指導計画の工夫や、授業以外での時間の確保を設定する必要がある。
- ・ 教員の一人一取り組みは、個人に任せられたために、取り組みに差が出た。実践する時間を設定し、低・中・高学年部会で取り組みのテーマを設定したい。
- ・ 調べたり、発表練習をしたりする時の活用だけではなく、録画や、録音を聞いて修正したり、振り返ったりして次の活動にも繋ぐ場面を更に増やしたい。

7. おわりに

児童自ら設定した課題の解決に向けて、伝えたい英語表現を決め、協力し合って練習し、発表する活動は、解決ができたという満足感を味わうことが出来る。しかしながら、自分の伝えたいことを英語で表現することは、インプットの少ない児童にとって容易なことではない。また授業時間も限られている。そのような現状で、ICT を効果的に活用することは、時間を効率的・効果的に使うだけに留まらず、児童の動機付けには大変有効であった。児童は映像によって集中度を高め、効率的な反復練習によって基本の英語表現を習得することが出来た。その上で児童は自主的に、言いたい英単語を電子辞書で調べたり、ICレコーダーを使って反復練習したりした。児童は課題に対して、自分が「話したい！」ことを、調べ、解決し、繰り返し練習し、英語で相手に伝えることで「話せた！」と実感した。この自信が、より積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度に繋がっている。ICT を活用しながら児童が英語に触れる活動を保証したことで、英語表現の定着の伸張も図れた。

本校は今年度、研究の成果を大田区教育研究推進校として都内・区内の小学校教員に発表し、ICT 機器を有効に活用しながら研究を行った成果を示すことが出来た。2年にわたって、実践研究助成校としていただいたことに感謝申し上げます。

< 参考文献 >

「プロジェクト型外国語活動の展開」 東野裕子・高島英幸 共著 高陵社書店

「児童が創る課題解決型の外国語活動と英語教育の実践」 高島英幸 編著 高陵社書店